
偶然壊された世界で

春谷公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然壊された世界で

【Nコード】

N5361Y

【作者名】

春谷公彦

【あらすじ】

少年・高木一人は突然、日常から追い出された。偶然得た異能、それが当たり前のようにある世界。昨日と同じ世界にいるはずなのに、見えるのは昨日とは違う世界。押し付けられたこの新たな日常は否応なしに進んでいく。

第一話 サイコロの一

例えば、仏のように優しい先生がいたでしょう。授業中寝ていても怒らない、テストは馬鹿みたいに簡単。しかし、その先生がいつまでも仏でいるという保証はどこにあるのだろうか。堪忍袋の緒が切れて、授業中に寝ていた生徒を容赦なく落第させ、テストは鬼のように難しくなる、ということは有り得ないわけではない。むしろ、その可能性の方が高いかもしれない。生徒はいつ暴落するかわからない株よりも遥かに不確かな確率にすぎているのだ。

例えば、一年間のうちに交通事故にあう確率は〇・九パーセントであるという統計がある。これを見ると、事故にあう確率などたかがしれているかもしれない。しかし、あくまでそれは確率論である。賽の目が当たってしまえば呆気なく事故にあい、場合によっては死に至る。

余談ではあるが（極論を言うところで論じていることすべてが余談なのだが）、一年間に事故にあわない確率は九九・一パーセント。これを人生八十年と仮定して八十乗すると、ほぼ半分。二人に一人は一生のうちに事故にあってしまう。

他にも宝くじ、癌、リストラ。自分には縁がないと思っていても、それが確率的に非常に低いものであったとしても、ゼロではない以上自分の身に降りかかり得るのである。

これは自分たちの身近な生活圏に留まらない。もしかしたら、一九九九年に世界は滅んでいたかもしれないし、二〇〇〇年にコンピュータが使い物にならなくなっていたかもしれない（これを回避したのは人間の努力によるものではあるが）。ただ単に確率的に外れただけの事で、十分に起こり得たことである。

二〇一二年に世界は滅ぶかもしれない。二一一年に猫型ロボットが誕生するかもしれない。誰かが勝手に何の根拠もなく述べたことであっても、それが確実に起こらないと誰が証明できようか。（

もちろん、確実に起こると証明するほうが格段に困難であることは考えるまでもないのだが)

明日には首相が暗殺されるかもしれない。一年後には相対性理論が覆されるかもしれない。十年後にはヒ素を食べる人間が出てくるかもしれない。

どんなに馬鹿馬鹿しくても、あるいは有り得そうでも、それは数字上の問題でしかない。仮にサイコロが六面中五面が六であったとしても、一が出ることは有り得るのである。六分の一というのは相対的に高い確率である。そして、それはどんなことにも当てはまる。つまり。

目の前で、人間が人間を何の道具も使わずに焼き殺していても、それは十分に可能性の範疇なのである。

「はあ、はっ……はあっ」

少年、高木一人は走っていた。逃げていた。人間から、脅威から、恐怖から。

それはあまりにも偶然過ぎた。たまたま友人と遊んでいて帰りが遅くなったただけだ。ただ単に気が向いて、いつもとは別の道から帰ろうと思ったただけだ。何の気なしに河川敷を通っただけだった。偶然がいくつか重なっただけにすぎなかった。

そこは薄暗く人通りの少ない道で、舗装されているが狭く、道の両端には木々が生い茂り死角の多い場所だった。この河川敷は概ね

そのような道が延々と続いている。

そこで信じられない光景を一人は見てしまった。

人が、人を、殺している。

それだけならば（そういつてしまふのはあまりに不自然だが）納得できたかもしれない。死角に隠れ息を潜め、犯人が立ち去るのを待ち（被害者には気の毒だがもう間に合わない）、逃げ帰って警察に電話すればよいだけのことだ。

しかし、それでは収まらなかった。

人が、人を、焼き殺している。

それだけでも（何度も言うが、不自然ではある）結局は同じことであつたはずだ。灯油をかけて火をつければ、人間は呆気なく燃える。死ぬ。犯人がいなくなつた後で警察に電話すればよいだけのことに変わりはない。

だが、しかし。

人が、人を、道具も使わずに、焼き殺している。

これも極論を言えば、同じことである。何とかやり過ごせばいいだけのこと。それが彼に与えられた選択肢のなかで安全に生還することができるもつとも確率の高い方法だった。だが、彼はその光景が彼の常識を遙かに逸していたためにその選択肢を取ることができなかつた。ただ、今現在、第三者がいたとすれば、本人の意思とは関係なくその場を動けずにいたためにその選択肢を取っているようには見えただろう。

夢だと思ひたかつた。だが、夢を現実と思ひ込んだことはあつたが、現実を夢だと思ひ込んだことはないし、これが現実だということも自覚していた。

上下スウェットでだらしなく髪の伸びた男が相手の頭を鷲掴みにしている。そこからあるうことか、炎が噴き出し相手の体を包み込んだ。聞くに堪えない叫び声をあげてその人は呆気なく死んだ。真っ黒なケシ炭になつたのだ。

真っ赤に燃えるその色が、常軌を逸したその光景が、一人の脳裏

に焼きつく。火、炎、身近なもの。飯を食うには必要不可欠で、煙草を吸う人なら、口元すれすれまでそれを持つてくる。それほどまで近い存在。

それが、こんなにも遠くて、残虐で、残酷なものだとは。放火などのニュースを見ていても実感できなかった感情が一人の体に湧き上がってくる。

鼻につく肉の焼ける臭い。人間の肉が焼ける臭いは初めてだった。
「うっ……」

嗚咽感がこみ上げてくる。

あまりに信じられない状況に一人の思考は停止していた。脳の信号が渋滞を起こし、感覚が麻痺する。立っているという自覚も感じられずにただそこにいるのが精一杯だった。

ついには、一人の体が震えだす。恐怖、脅威、畏怖、似たような負の感情がふつふつと湧いてくる。

膝が笑いだす。顔は引き攣り笑顔などないが、膝は、何がおかしいのかというほど笑っている。笑うなと自らに訴えかけてみても、無駄だった。

「……あ」

前触れもなく、完全に力が入らなくなつて、その場に尻餅をついた。もちろん周りの草木はガサガサと音を立てるし、もちろん犯人にも聞こえただろう。ここでもっとも安全だった選択肢を彼自身が消してしまった。

犯人は声を上げなかった。そのため、気が付かれたかどうか瞬時にはわからなかった。だが、声の代わりに、男が一步踏み出した音が聞こえた。それは、やけに大きく聞こえた。その音は確かに一人の方に向かっていった。

体が動かない。力が入らない。手足が震える。

動け、動け……！

動かなくては、逃げなければ、間違いなく殺される。

「……動、けっ……！」

自らの体を叱咤し、一人は跳ぶように立ち上がった。

やつのことで体の制御権を取り戻した一人は相手を確認することなく、走り出した。同時に男の足音が早くなったのが聞こえた。

走った。ひたすら走った。追いつかれまいと走った。追いつかれれば殺される。考えるまでもなかった。

一度だけ後ろを振り向いた。まるで適当に鬼ごっこをしているのかと思えるような、つまり、まるでランニングでもしているかのうに、軽々と余裕を持って走っているように思えた。いつでもお前くらい殺せるぞ、そう言っているかのようで、一人の恐怖心を一層煽る。

「そつだっ！」

一人は一つの策を思いつく。というよりも、なぜそう考えなかったのだろうと思ってしまうほどのものだ。この河川敷は平行する道路よりも五メートルほど低くなっているが、その道路は大きいもので、人通りこそ少ないものの車の交通量は多い。道路までの五メートルは階段以外は急な坂だが上れないことはない。

道路に出さえすれば……。出さえすればいくら殺人鬼と言ってもやすやすと犯行に及ばないだろう。

一人は進路を右に変え、芝状の坂を上り始める。

ところが。

「……あっ!？」

夜露のせい、見事なまでにスリップして一人は芝の上につつ伏せになる。

追っていた男の足音もゆっくりになり、近くなる。一人は恐怖のあまり、うつ伏せになったまま相手を確認することもできない。自分の鼓動だけがやたらと大きく聞こえた。走ったための汗のほかに恐怖からくる冷や汗が混じっているのがわかった。

万事休すとはこういったことを言うのだろう。

やがて足音が止まる。

ゆっくりと手が伸びている、気がする。

掴まれれば先ほどの人と同じように黒焦げの炭になってしまう。

死にたくない。

助けて。

誰か。

お願いだ……。

願ってみても状況は変わりはないだろうことはわかりきっていた。

一人は死を覚悟した。

刹那、冷たい空気を感じた。

静かだった周りが、さらに静かになった気がした。

一人は恐るおそる首だけを回して振り返った。

男が、氷漬けにされていた。

氷の彫刻のように真っ白になっていた。氷の結晶の中に人が入っているようにも思える。

右手は一人の寸前まで伸ばされ、表情は不気味なほどに悦びに満ちている。それが、時が止まったかのように、まるで芸術品のように動かないでいる。

その後ろには、また違う男が立っていた。

ツンツンの頭に鋭い眼光、無精髭に頬には切り傷。筋骨隆々とま

では行かないが十分すぎるほどの体躯。服装こそスーツを無難に着こなしているものの、正直堅気の人間には見えなかった。

「おう、大丈夫か少年」

その顔と見事にマッチングした想像通りの低い声。幸いだったのは、思った以上に棘のない口調だろうか。それでも一人を委縮させるのには十分だった。

「よかったな、面倒くせえことにならなくて」

そう言う男は胸ポケットから煙草を取り出しライターで火を点けようと試みる。だが、ライターはオイル切れらしく、むなしく小さな火花を散らすだけだった。

「ちっ、面倒くせえ。どうせなら最後にコイツに火、もらっておけばよかったな」

男はライターを投げ捨てる。その様子を一人は呆然と見つめる。

「あ？ ああ、見たからな。コイツが殺ったやつ。面倒くせえ、あれじゃ男か女もわかりやしねえ。ん？ ちげえよ。そりゃ助けたかったよ。見殺しにしたわけじゃねえ。俺が来たときはもう遅かった。残念だな」

男はべらべらとまくし立てるが、正直なところ、一人は彼の言っている意味がほとんどわからなかった。ただ、男から視線をはずすにいた。

彼は自分を助けてくれた。だからといって気を許していいとは思えない。彼も、常識では考えられないことをやってのけている。人を氷漬けにしているのだ。そもそも、助けたのは結果論であって、助ける気はなかったかもしれない。

一度は落ち着いた得体の知れない恐怖が再びこみ上げてくる。

「つと。最後の仕事だ。悪く思うなよ、少年」

「え？」

「つつても、覚えてはもらえねえけどな」

男は怪しげな笑みを零す。そしてポケットから別のライターのようなものを出す。

「ああ。これ、ライターじゃねえよ。って、あれ？」

男は上半身だけ起こした一人の顔にそのライター状のものを近づけるが、それは先ほどのライターと同じくカチカチと小さな音を立てるだけで、何も起こらなかった。

「マジかよ……。面倒くせ、ぶっ!!」

一人は起き上がり右足を振り上げて男の顎にクリーンヒットさせた。男は豪快に倒れこむ。その隙を突いて、坂を駆け上り、道路へと出た。

「あ、おい！」

不意をつかれ倒れこんだ男はすぐさま起き上がり、少年の後を追うように道路へと出たが、それだけだった。そしてポケットに手を突っ込んで呟いた。

「ああ、面倒くせえ……」

第二話 鳴らない目覚まし

さて、普通、人は朝起きるときにはどうやって起きるだろうか。何も使わずに起きられる？ それは素晴らしい。是非とも真似したいものだ。

親に起こしてもらおう？ ちょっと甘えすぎやしないか。そろそろ自立してみよう。

目覚まし時計を使う？ うん、それが一番無難だ。最近は携帯電話のアラームを使う人も多いだろう。どちらにせよ一緒のことだ。この方法が大多数だろう。

さて、ここで第二問。前日、何があったか知らないが、帰ってくるなり全身に疲れがどつと出て、目覚まし時計もセットせずにそのままベッドに倒れこんでしまったらどうなるだろうか？

答えは――

「一人！！ いつまで寝てるの！？」

一階から母親の声がする。怒っているようにも聞こえる。

「……ん、う……ん」

一人は寝返りを打つ。そして母の声に反応してゆっくりと目を開く。布団は剥ぎ取られ、ベッドの端にかろうじて乗っかっている状態であった。いつものことながら寝相の悪さが見て取れるのだが、逆にどうやってベッドから落ちずにいられたのかと自分でも思ってしまうほどだった。

時刻を確認しようとするが、机の上に置いてある目覚まし時計はベッドに寝たままでは角度的に見えない。仕方なく向きを変え（つまり起き上がる気はない）、壁に掛けてある時計を確認する。

八時十五分。

急に頭が覚醒してくる。行動予定、目的地、所要時間、自分でも驚くほどのスピードでそれが計算できた（とはいえ大した量ではな

いが)。

朝のホーームルームは八時半からで、学校までは自転車です十分。五分で準備ができればぎりぎり間に合うかどうかというところだ。つまるところ寝坊である。どうせなら潔く諦められるほどの時間に起きてみたかったと思わなくもない。

「起こすならもつと早く起こしてくれ！」

部屋の外に聞こえない程度に叫び、急いで飛び起き、着替えようとする。だが、自分が制服(グレイのチェック柄のスラックスに紺のブレザー)を着たままであることに気づく。昨夜はそのまま眠ってしまったようだ。

寝汗をかいたYシャツは気持ち悪いが、着替えている余裕はない。どうして、そのまま寝てしまったのか、目覚まし時計が鳴らなかったのか……。余裕はないはずなのにそんなことを考えてしまった。

「……あ」

そして昨夜の惨状を思い出した。人が人に焼き殺され、殺した人がまた別の人に凍死させられ、そして自分が襲われそうになった。果たして、このまま学校へ行ってもよいのだろうか。自分は相手の顔を見ているのだ。向こうからすれば放っておく訳がない。登校中に襲われるかもしれない。学校で襲われるかもしれない。

どうすればいい？ 警察に……。いや、馬鹿馬鹿しいと一蹴されて終わりだろう。

いや、ちよつと待て――

「一人！！ まだ寝てるの？ いい加減に……」

「わかってるよ！ すぐ行くよ！」

そう、馬鹿馬鹿しい。有り得ない。人が燃えた？ 人が凍った？ そんなことあるはずがない。昨日は友人と遊びすぎて疲れてそのまま寝てしまったんだ。悪い夢でも見たんだ。昨夜は夢と現実がどうとか考えていた気もするが、夢の中では現実だと思っているのだから抵抗しようがないのは当然だ。

「それでも夢と現実の区別くらいいつかと思ってただけだな……」

一人は呟く。ゲームのしすぎかな、と自分を戒め、とりあえずYシャツを替えよう、と思った。

一人は自転車を思いっきりこいでいた。日は高くなりつつあるが、風はまだ肌寒い。そんな春の気候を全身に受け、一人は自転車をこぐ。ホームルームは間に合わなかったが、一時限目には間に合わせたい。

普段一人は徒歩通学である。理由は特にない。強いて言えば別に急いで登校する必要も急いで下校する必要もないから、とでもなるうか。忙しない世の中への小さな反抗である。

ただ、今日はそうも言っていられない。別段真面目な生徒であるつもりではないが、遅刻やサボりは嫌だった。授業を一度休むと、朝に歯を磨かなかったような、そんな不快感に襲われるのだ。そういえば、今日は歯を磨いていない……。これももちろん不快だ。

それにしても、いつも自転車で登校していれば、昨日のように放課後に直接友人と遊んで、徒歩で帰ることなどなかったのに。自転車があれば昨日のような――

「だ、か、ら――！」

あれは夢だったのだ。そう自分で納得したではないか。馬鹿馬鹿しい。

一人は自転車をこぎ続けた。

昨日の（夢だ！）川沿い通りより一本住宅地側にある道路、通称バス通りを真っ直ぐに徒歩二十分、自転車十分。それが一人の通学路である。中規模の公園が一つと、宗派はわからないが庭の桜が綺麗な寺が一つ、それ以外は文字通り住宅しかない。

漫画などであれば、通学路に商店街があつたりして、駄菓子屋のおばちゃんが親切だったりするものだが、あいにくコンビニすらない。

真っ直ぐに、何にも目移りすることなく、一人は学校へと到着し

た。時刻は八時三十五分。一時限目は四十五分からなので、（どうせホームルームには間に合わないということもあり）ようやくゆつくりできる。

自転車駐輪場に止め、籠から学生鞆を取出して歩き出す。

稲宮高等学校。駅から徒歩二十分ほどという微妙な立地だが、市内に数十ある高校の内、学力的には上から数えた方が早い、割と進学校と呼べる公立高校である。一方、部活動といえば、下から数えた方が少しは早いか、というくらいの中堅校の下くらいである。もちろん、部活動によって差はある。ただ、総括すると、お世辞にも強豪の仲間入りは無理そうである。

伝統ある古い学校でもないし、最近できた新しい学校でもない。別に際立った行事があるわけでもないし、校則も、厳しいとは言われているが、内に入ってしまったえばなんてことはない。どの学校でもそうだろうが、携帯電話の持込を禁止したところで、守る生徒などいないし、たいていは見つからないのだ。それを外から見るときに厳しいと見えるかどうか、である。

授業にも間に合う時間なので急ぐことなく玄関で上靴に履き替え、歩いて階段を上る。さすがに人は少なかった。同じように遅刻したらしい生徒が数名いただけである。

三階が一人の在籍する二年次の階である。大体のクラスはホームルームが終わっているようだが、一時限目がすぐに始まるので廊下に出ている生徒は少ない。

遅刻した場合はまず職員室に行かなければいけない気もしたが、遅刻をしたことがないので一人は覚えていなかった。後でどうでもなるだろうと彼は自分のクラス、二年三組の教室の後ろのドアを開けた。扉の音につられてクラスの大半が振り返った。

「お、珍しいな。お前が遅刻なんて」

廊下側から二番目、後ろから二番目と、なかなかおいしいポジションとも思える席に座る眼鏡の男が話しかけてきた。

佐野良介。一人とは高校からの友人なので一年と少しの付き合い

だが一緒にいることの多い男である。昨夜ももうひとりと三人で駅前のゲームセンターで遊んでいた。

「目覚ましが鳴らなかった」

そう答えると一人は自分の席へと歩き出す。すると後ろからドタドタと足音が聞こえてきた。

「ギリギリセーフ!! 痛っ!!」

後ろから走ってきた少女は中を確認することなく教室に走りこんできた。そのせいで、入り口にいた一人と衝突し、不意を突かれた一人はバランスを崩し、隅にあった掃除用具入れに頭をぶつけることとなった。

クラス中がどつと笑いに包まれた。心配の声がないあたりがなんとも切ない。

「いたた……。あ、一人、おはよう!。一人も遅刻?」

ツインテールの少女は尻餅をついたが、すぐに起き上がって、一人に挨拶をする。あはは、と笑いながら尋ねる様を見ると謝る気はなさそうである。

「花梨、てめえ……。まず、謝りやがれ!」

果山花梨、一人の幼馴染である。寝坊・遅刻の常習犯。ツインテールが特徴的で、一部男子に人気があるとかないとか。花梨はどういう意味か笑顔を見せるとそのまま、自分の席へと向かった。

「こ、の……。!」

「やめとけ、いつものことだろ」

良介が嗜める。一人のほうは見ず、参考書を読みながらではあるが。「手、出したら負けだぞ」

「言われなくてもそんならいわかってるっつーの」

そう言って、一人は窓際一番後ろの席に座る。お気に入りの席である。できることならもう席替えはしたくないと思えるほどのベストポジションだ。

一人の一つ前に座っている男が振り返った。「よお、相変わらず朝っぱらから騒々しいな、お前ら」

「うるせえな。お前ら、つて言うな。騒がしいのは花梨だけだ」

「ま、どっちでもいいけどな。用具入れに頭ぶつけたときのお前の顔、傑作」

男はこらえるような笑みを見せた。

「おい、太一。今度はお前がぶつかってみるか？」

一人は唸るような低い声で彼に言う。

西村太一。昨日遊んでいたもうひとりである。小学校が一緒に、中学の時に転校していったのだが、高校でまた一緒になったという、なかなかの腐れ縁である。

「よせよお。お前本気でやりそうだからな」

一人以上にツンツンの頭を振って太一は言う。

もちろん、本気以上の力でぶつける気である。

授業とは、勉強をする時間である。教師という、勉強を教える側が一人と、生徒という勉強を教わる側が多数。生徒とはお金を払ってまで勉強したいと思っている人間であるはずである。たいていは親が払っているのだが。最近は国が払ってくれるようになった。

だからだろうか、こういう生徒もいる。「授業は昼寝の時間だ」思っているかどうかは別として、授業中に寝てしまう生徒は少なくない。おそらく一時間何もするなと言われれば、退屈でありながらも眠ることはできないかもしれない。それが授業の形式を取っただけで用意に眠れてしまうのはどうしてだろうか。授業という形態が、人間の長い歴史にわたって、催眠効果を催すものであると人間の遺伝子に組み込まれているとしか思えない。

話は逸れたが、要するに、一人は授業中に眠ってしまうような人間なのである。授業をサポートしたりして休みたくないと思いつつも、いざ授業となると熟練の催眠術師の術中にはまってしまうのである。このように内容よりも参加することに価値を見出している輩が他にも多数いると一人は自分に言い訳していた。

午前中の四つの授業の内、どれだけを睡眠に費やしただろうか。

さらに、四時限目が終わっても一人は机に突っ伏していた。

豪快に眠る一人の頭に分厚い参考書が降りかかる。それはコツンと心地よい音を立てた。

一人は頭をさすりながら、ぜんまい仕掛けの人形のようにゆつくりと上半身を起こす。あたりを見渡して自分の頭を叩いた犯人を探した。そして片手に参考書を持っている良介を睨みつけた。そしてそれを見て笑っている太一も睨みつける。太一には一割増しの睨みをプレゼントした。

「ほら、飯買いに行くんだろ？ 無くなるぞ」

一人の睨みなどものともせず良介が口にする。見た目通りに冷静な人間である。眼鏡キヤラは伊達ではないということだ。

「うい」

一人は風船から漏れた空気のような声を出した。それほどに眠いのである。

「そんなに眠いなら寝ていいぞ。俺が買ってきてやつから」

太一が立ち上がる。が、それに反応して一人はスイッチが入ったかのように立ち上がった。

「お前が買ってくるろくな物じゃないだろ」

「あたぼうよ！ ろくじゃない物を選んでるんだからなっ」

そう言った瞬間に一人の右ストレートが太一を襲う。それを予測していたかのように太一は身を屈めて避ける。だが、一人はそのまま太一の頭を掴んで机に押し付けた。もちろん、軽くである。それでも顎をぶつけた太一が悶絶する。

「行くぞ、良介」

太一に構うことなく背を向けて教室を出ようとする一人。

「……気の毒に」

哀れみの視線を太一に送ると良介もそれに続く。もったも、いつものことなので哀れみの量もたいしたものではない。

「ちよ、ちよっと待てよお」

顎を押さえながら慌てて後を追う太一。

三人で教室を出ようとしたところだった。

「あ、一人？」

教室の真ん中あたりで友人と昼食をとっている花梨が一人に話しかけた。

「あん？」

「えつとさ……」

「何だよ？ はっきりしろよ」

「ジュース買ってきて！」

「パシリかよ！」

三人が出て行ったあと、花梨は下を向いてため息をついた。そして友人の遠山柑奈に頭を小突かれた。

第三話　じゃんけんひとり負け

三人は一人の机を囲んで対峙していた。

一人の机にはパンが二つ。焼きそばパンとたまごサンド。

というのも購買の競争率は高く、一人が居眠りしていたせいで出遅れてしまったのだ。残っていたのはそれだけだった。むしろそれらが残っていたのは不幸中の幸いというものだろう。

三人の人間に対して、パンが二つ。どうなるかは自明だろう。

最初は出遅れた一人に罪をなすりつけようとした良介と太一だったが、一人がそれで引き下がるはずがない。それゆえ対峙し、精神を統一しているのだ。

「……行くぞ」

一人が静かに告げる。

「ああ」

「おうよ」

決戦の狼煙が今上がった。

「出さなきゃ負けよっ！　最初はグー！　ジャンケン、しょー！！」

一人はグー。そして二人は、パー。

「うおお！？」

「相変わらず弱いな」

良介が右手で眼鏡を直しながら勝ち誇った表情で言う。

「くそっ」

「因果応報ってやつだよ」

太一が笑いながらそつと焼きそばパンに手を伸ばすが、良介にしっかりと阻まれていた。

本当に意味を知っているのか？　と太一に対して思っても、一人は何も言い返せずに拗ねるように自分の席に座った。良介と太一がどちらを食べるか争って再びジャンケンをしているが、それを見るのも癪なので、不貞腐れて窓の外を見ていた。

ふと、高級そうな車が学校に入ってくるのが見えた。

「すっげえ車……」

一人が漏らす。それを聞いて勝ち誇っていた太一と少し悔しそうな良介がつかれて外を見る。

「何あれ、すげえ。フェラーリ？」

一人は言った。太一がもの珍しそうに窓に張り付くように身を乗り出していた。窓を開けるには少々寒い。

「青いフェラーリなんてあるか？ フェラーリって赤じゃないのか？」

「へえ。いや、高そうな車って言ったらフェラーリかなって。良介、お前詳しいのな」

「このくらいじゃ詳しいって言わないよ」

一歩引いて見ている良介の表情を一人は覗いた。これ以上の知識があるわけではなさそうだった。

「まあ、別にどっちでもいいんだけどよ」

一人は再び車に目を向ける。左のドアから出てきたのは女。どう見てもそちらにハンドルがついている。フェラーリでなくとも外車であることは間違いないようだ。彼女は赤いド派手なスーツを着て長い髪を揺らしている。三階からではよくわからないが、おそらく美人だろう。もしくは美人でもないのに派手な格好をする勇気のある肝っ玉か。

そんなどうでもよいことを考えていたが、右から出てきた人物を見て、背筋が凍るような思いがした。冷たい水に突っ込まれたような、いや、それでは足りない。真冬の湖にでも突っ込まれたような、そんな寒気がした。

女の方はよく見えなかったが、それは初めてみる顔だからだ。一度見た顔なら三階からでも割とわかる。

無精髭に頬に傷。昨日の男だ。人を殺したやつを殺した、しかも信じられないが何も使わずに凍らせたのだ。

あれは……夢じゃなかったのか？

そんな疑問に答えてくれる者はいない。ただ、頭の中で警鐘がガングンと鳴っていた。

一人はすぐさま鞆を掴むと立ち上がって駆け出した。

「おい!?!」

「帰る!」

驚いた良介と太一が声を上げるが、一言そう言っただけでそのまま駆け出していった。

「……何だよあいつ」

太一が焼きそばパンをほお張りながら呟く。

「何よ、あんたたちどうしたのよ?」

一人の奇行に驚いたのは二人だけではない。クラス中の皆が注目した。いつの間にか教室は静かになっていた。その中で柑奈が代表するように尋ねた。

「知らねえよ。何か、車を見たたん出てっちまった」

「車あ!?!」

柑奈と、その後を追うように花梨が窓際まで来て外を覗き込んだ。

「車ってあの青いの?」

柑奈は窓越しに車を指差す。

「ああ。あの高そうな車」

「高いの?」

「知らん。高そうじゃん」

「あの車が何だった?」

「知らねえって。一人に聞いてくれよ」

そう言う太一は肩をすくめた。柑奈は良介とも目を合わせるが、彼も首を横に振っている。

「……一人」

花梨はひとり呟き、不安そうに外を見つめていた。車の二人組が視界から消えると、入れ替わるように一人が出て行った。

赤いスーツの女が車を降りた後、続いて傷の男が車を降りた。男は目を細め恨めしそうに校舎を眺めた。

良く言えばベージュ、あるいは単に白が黄ばんだのか、少し色のついた白い外壁。何の変哲もない校舎だ。左を向けば自転車置き場、その奥にはテニスコート。

昼休みなのか外にいても玄関から喧騒が漏れてくる。サッカーボールを持った男子の集団が校舎の裏へと走っていった。テニスコートとは反対方向だ。裏にはグラウンドがある。

「ここか……」

どういうわけか不機嫌そうに声を漏らす。

「ええ、あなたの記憶が正しければ、彼はここの制服を着ていた、ということになるわ」

女はあまり言葉に起伏を見せず、事務的な口調で言った。

「ったく。曰くつきじゃねえのか？」

「統計学的に見て、他の集団との有意差は認められないわ」

「小難しいこと言うんじゃないよ、情報課」

男は胸ポケットから煙草を取り出して口に咥えようとしたが、女に睨まれてその手を引っ込めた。公共の場での歩き煙草はもう許されない時代だった。

「私にそんな口利いていいのかしら？」

女はあくまで事務的な口調で話す。その冷たい口調のおかげか男は黙りこんだ。男は舌打ちこそしたが、それ以上何も言わなかった。

「そもそも、何で取り逃がしたのかしら？」

「置換機が空になってた」

「信じられない。減給物ね」

女はそこで初めて口調を変化させた。だが決してよいものではなく、呆れ返っている。

「ああ、だからお前を呼んだんだ。上には報告できない」

「あら、私を何だと思ってるの？ 道具だとも思ってる？」

「特命部情報課総合情報係係長、龍瀧千晴。二十八歳。女性。スリサイズは――」

「はいはい。そこまで」

龍瀧は手を叩いて制止する。

「ちゃんと人間として見てるし、れっきとした信頼できる同僚だよ」

「それはどうも。けど、別に私を連れてこなくてもよかったんじゃない？　もしかして、私ってアツシー？」

「いや、俺だって車持つてることくらい知ってるだろ」

「あのオンボロビートルを車って呼ぶのかしら？」

彼女はわざとらしく首をかしげ、鼻で笑った。このやり取りの中で一番の感情の変化である。

「最近変えた。ニュービートルだ。英断だったがな」

「じゃあ、一人で来ればよかったじゃない。情報はあげたんだから私にだって仕事はあるのよ？」

「阿呆。俺が一人で行ったら堅気に思われんだろうが」

「ああ、なるほど」

「納得すんな、阿呆」

そう言いながら二人は生徒玄関の右にある来客用の玄関を通ろうとした。ふと、龍瀧が生徒玄関の方に目を向けて足を止めた。

「あら、サボりかしら？　感心しないわね」

「あ？」

「ほら、あれ」

そう言っただけで彼女は指を差す。その先には慌てて駆け出す男子生徒の姿があった。彼は自転車置き場に向かってるので、昼休みに遊ぼうというわけではなさそうだった。彼は鞆を乱暴に自転車の籠に突っ込むとそのままこぎ出していった。体調不良で早退というようにも見えない。

その姿を見て男の表情が和らいだ。

「何よ、気持ち悪い」

「鴨が葱背負ってきた」

「じゃあ、あれが……。追う？」

「お前の車じゃ気づかれるだろ」

「じゃあ、どうするの？ 相手は自転車よ？」

「俺が追う」

「……見られないでね」

「俺を誰だと思ってる」

「特命部執行課課長、氷室大牙。二十九歳。男性。右利き。好きなものは甘いもの全般。嫌いなものは山葵と辛いもの。口癖は……」

「わかった、もういい。悪かった」

氷室は手をひらひらと振り、鬱陶しそうな表情を作る。そして、龍瀧に聞こえないように「面倒くせえ」と口癖を呟いた。

「自分で自分の尻拭いなんかしたかねえよ」

一人は全力で自転車をこいだ。ハンドルを強く握り、できる限りの力でペダルを踏む。行き先は特にない。遠くへ。ただ遠くへ。やつらから遠くへ。それだけを考えていた

信じられなかった。夢じゃなかった。

あの男は何者だ？ なぜ自分を追う？

追う？ 彼は自分を追っているのか？ 確証はない。だが、少なくとも学校で一度も見たことはない。それに昨日の事件、偶然にしてはできすぎている。

ならば、やはりあの男は自分を追っているのだろう。なぜ？

同じような疑問がいくつも一人の頭を巡る。答えはない。とにかく今は、逃げなくては。

どこへ行こうか。家は危ない。学校がばれているのなら、家も割れていると考えた方がいいだろうか。だがそれならば朝真っ先に来るはずだろう。けれど安心はできない。

ならば、街中に行こうか。人ごみに紛れれば少しはマシかもしれない。

いや、警察に行けばいいんだ。昨日のことは信じてもらえなくとも、変なやつに追われていると言え、保護してもらえはすだ。よし、それでいこう。そう決めると一人はハンドルを一層強く握り締めた。

「よう、そんなに急いでどこ行くんだ？」

呼吸が止まるかと思った。心臓が高く跳ね上がる。そして、全身から血の気が引いていく。

強い力で自転車を引き止められた。

「う、わっ！」

無理やり引つ張られたせいでバランスを崩し、自転車から振り落とされるようにして、地面へと転げ落ちる。どこか擦りむいたかもしれないが、全身が痛くてわからなかった。

恐るおそる顔を上げると、そこには例の男が立っていた。右手で一人の自転車の荷台を掴んでいる。

それ以外は何も持っていなかった。周りを見渡しても何もなかった。

車も、バイクも、自転車も、何にも乗っていない。

自分の足で自転車に追いついたとでもいうのだろうか？ 適当にこいでいたわけではない。走っても追いつけないだろうスピードでこいでいたはずだ。

まさか。

有り得ない。

信じられない。

男は一人の自転車を手から放した。

「あー、一つ聞くが、昨日のこと誰にも喋ってねえよな？」

口封じだ。一人は直感する。逃げ出しても追いつかれる。ならばと咄嗟に体が反応した。

飛び起き、間合いを詰め、相手の頭を目掛けて右足を振り出した。それを男は左手の甲で軽々と受け止める。

「あー、そつだ。昨日の顎、効いたぜ」

男は右手で顎を触りながら笑みを浮かべる、強面の顔にはやけに不気味に映った。

「うわああああ！」

右足を引つ込めると、一人は男に突進する。男はやれやれとため息をつくとひよいとそれを避ける。勢い余って一人は地面に倒れこんでしまう。

「おいおい、取って食おうって気はないぞ」

男は笑うように言った。だが、取って食わないなら、凍らして殺す気だろうと一人は思った。

男はポケットに手をつ突っ込んだまま一人へと歩み寄る。一人は地面に尻餅をついたまま後ずさりする。すでに対抗する気力はなかった。

来るな。

来るな。来るな。

来るな来るな来るな！！

「やめろおおおおお！！！！！」

次の瞬間、一人は違う景色を見ていた。家の屋根が並んで見える。何が起こったのか全くわからない。

這い蹲るようにして屋根の端まで行って、下を見下ろすと、一人の自転車が見えた。男もいる、目が合う前に一人は体を引いた。どうやら近くの民家の屋根に上ったらしい。

どうやって？

「おいおい、何だってんだ……？」

途端に体が重くなる。マラソンを走った後のような、それほどの気だるさを感じた。

後ろから舌打ちが聞こえた。それを聞いて我に戻るが、振り向く間もなく首に衝撃を受けた。

「あー、面倒くせえ」

一人の意識は暗転した。

第四話 はずれくじ

一人が目覚めると、まず自分が縛られていることに気づいた。足をガムテープで縛られ、手には手錠を掛けられている。

そして、次に自分が車に乗せられていることに気づく。ラジオも音楽も流れていない。普段、親の車に乗ればどちらかは必ず流れているので、それがないこの車ではエンジンの音がやたらと大きく聞こえた。

どうやら後部座席に横向きに寝かされているようだ。手錠は無理だとしても、足はどうにかならないかともがいてみるが、結局徒労に終わった。

立ち上がることもできないのでどこを走っているかも確認できない。だが、寝た態勢でもかろうじてビルが見えることから、高いビルがある場所、つまり街中を走っているのだという想像はついた。

「目が覚めたみたいね」

信号待ちで車が止まった際に振り向いた運転席の女が声を掛けた。ストレートの長髪に整った顔立ち、赤いスーツが目立っている。十人いたら三人くらいは「好みじゃない」と言うかも知れないが、十人が十人美人だと答えるだろう。一人も好みじゃないが美人だと思っただ。

「まったく、面倒くせえことしやがって」

助手席の男が言う。先ほどの男だ。子供が十人いたら十人泣き出すだろう。

一人は下になっている右腕の肘を支点にして反動をつけて無理やり起き上がった。

「どこ連れてく気だよ!？」

震える心を鼓舞して強気に言う。それを聞いて男は眉を吊り上げ、「強気だねえ」と笑った。

「もうすぐわかるわ。あと十分、誤差プラスマイナス二分で所かし

ら」

女はそれだけ言つて車を発進させた。男が「細けえよ、情報課」と呟いた。一人にも聞こえたということは女にも聞こえただろう。そのせいか、それからブレーキが乱暴になった気がした。

それほど長い時間ではなかった。十分もせずに（おそらく十分マインス二分といったところだろう）女が「ここよ」と言つたので、窓を覗きこんだ。

一人の頭にはまず疑問符が浮かんた。そして次に目の前の光景の受け入れを拒否した。その建物が子供の頃に社会科学見学で訪れた場所であり、そこが自分を今の境遇に置くとは考えられなかったからだ。

「警、察……？」

「そう、警察よ」

「あー、自己紹介が遅れたな。特命部執行課課長、氷室大牙だ」

「特命部情報課情報収集係係長の龍瀧千晴よ」

警察？ この強面が？

一人は俄かには信じられなかった。

車は地下駐車場へと入る。手際よく車を止めると、足のテープを剥がされ一人は歩く。

エレベーターに入り、龍瀧が地下のボタンを押した。

「地下駐車場の、さらに地下？」

思わず声が出る。

「ああ、新しい部署なんだよ、特命部」

「ずいぶん、待遇の悪い部署だな」

「まあ、見られてもまずいからな」

「あ？」

「じきにわかる」

「それより、俺は何の罪状なんだよ？」

彼らが警察であるとわかって一人はだいぶ落ち着いた。それと同じになぜ自分が拘束されなくてはいけないのかという怒りも沸々と

わいてきた。氷室を睨みながら尋ねる。

「あ？ 罪状なんてねえよ」

「は？」

訳もわからず、一人は手錠をかけられた両手を突き出す。たしか、何の罪状もなしに手錠をかけてはいけないはずだ。

「ああ。だつてお前、暴れるだろ」

こんな適当な男が、本当に警察の者なのだろうか。

「当たり前だ！ 説明もなしに！」

「説明すりゃ、おとなしくなるのか？」

「それは……」

「まあいい。それを説明するために連れてきたんだ」

エレベーターが止まると、狭い廊下に出る。手前右の扉は開けられており、中はいたって普通の職場のように人々がデスクに向かい仕事をしていた。一人たちはそこには入らずに、廊下を進む。扉は多くない。左右の壁に二つずつ、奥に一つの計五つ。突き当たり左には自販機があり休憩所となっていた。

一人たちは突き当たりにある扉に入った。そこは小さな会議室のようで、白い壁、白い机、白い椅子にホワイトボードと白で統一されていた。角には観葉植物も置いてあった。

明るい雰囲気だったが、一人にはこの白さがかえって無機質で冷たいものを感じられた。

「何か飲むか？」

氷室が財布を取り出しながら尋ねる。

「いや、別に……」

「あ、そ」

氷室は部屋を出て行く。どうやら自分のものだけ買いに行くようだ。

龍瀧が近寄って、手錠の解錠をしてくれた。

「適当に座って」

事務的な口調で彼女は言う。冷たい印象を受けたが、これが常な

のだろうか。一人はいくつかある椅子のうち、一番扉に近い椅子に座った。二人が警察の者であるとわかっていても、出口を塞がれるのは怖かった。

氷室が缶コーヒーを片手に部屋に入ってくる。

「じゃあ、私はこれで」

龍瀧は軽く頭を下げ、部屋を後にした。

「さて、何から話そうか」

氷室は缶コーヒーのタブを空けながら、一人の向かいに座る。一人は目線を落とした。できれば目を合わせたくない顔である。

「あー、昨日は怪我なかったか？」

「……ああ」

今日は、あちこち擦り剥いたがとは言えなかった。向こうが危害を加える気がないとわかってても反抗するのはなかなか恐ろしかった。「そうか、そりゃよかった。昨日はテンパったろ？ いきなりあんな現場に遭遇して」

「そう！ 何なんだよ！ 夢じゃなかったのかよ……」

一人はその話題に勢いよく噛み付いたが、最後は懇願するように、搾り出すように声を小さくしていった。完全に下を向いてしまう。

「……残念ながらな」

「何なんだよ、あれ……」

「このことか？」

急に部屋の温度が下がった気がした。驚いて顔を上げると、氷室が缶コーヒーに手をかざしている。その缶コーヒーは見る見るうちに凍っていき、すぐに氷の塊となった。

一人はやはり信じられなかった。昨日の記憶が焼きついていようと、目の前でそれが起きようとも、夢を見ているとしか思えなかった。有り得ない。

一人は何も言えなかった。

「これに名前はない。みんな適当に”能力”とか”異能”とかって呼んでいる。能力には個人差があって、火を出すやつもいれば俺み

たいに物を凍らすやつ、物を自由に浮かせたり動かしたりするやつ……。色々だ」

「信じられねえ……」

「信じられなくてもいい。だが現実だ。俺だって幽霊は信じてねえ。けど、見たら信じるしかねえ。それと同じだ。起源ははつきりしてねえが、最近使えるやつが増えてきた。まあ、増えたのか、もともと大勢いて表にでるようになっただけかは知らねえが。どっちにする理由は知らねえし知りたくもねえ。俺の仕事じゃねえし。問題は、それを使つて何かやらかそうつてやつらが出てきたことだ」

「……昨日みたいにい？」

「ああ、力の目覚めとともに破壊衝動を抑えられなくなった馬鹿が、人に向けて使つたりしてんだよ。だが、通常の警察じゃ手に負えねえ。だから緊急でそれに対抗する組織が必要になった。それが俺たち特命部だよ。餅は餅屋。異能に対して異能で対応する部署だ」

「知らねえよ、そんなの」

「当たり前だ。こんなの公表できるわけねえ。パニックになるし、第一信じて貰えねえ。お前だってまだ信じてないだろ？」

当たり前である。あまりにも非現実的な話を持つてこられてもいまいち信用できない。だが、それと同時に、それを実際に目の当たりにして、否定できない、認めている感情も確かにあった。その二つがまさに天秤にかけられ酷く揺れている状態である。

「だから、秘密裏に処理する必要があった。だから、部署自体も地下にあるし、上の連中はほとんど知らねえ。『わけがわからなかったら特命部に任せろ』それくらいしか教えられてない。そのくらい極秘だ。政治家もトップの連中しか知らねえだろうよ。いや、そこんとも俺は詳しくねえ。もしかしたら政治家にもなりやみんな知ってるのかもしれない。とにかく、表に出ちゃいけない、それが俺らだよ。わかったか？」

「まあ、見たものはしょうがねえ。信じるしかねえな。けど、俺にどうしろってんだよ？ 誰にも口にするなってか？ 言われなくて

も誰も信じねえよ」

一人は吐き捨てる。

「まあな、だが、信じて貰えなくても喋っちまうやつはいるんだよ。火のない所に煙は立たないってな。ん？ 違うか？ まあいいや。んで、そんなやつらをどうにかするつてのは面倒くせえのさ。だから、最も手っ取り早い方法を使つてんのさ」

手っ取り早い。その言葉を聞いて一人の体が強張る。

「おいおい、だから殺したりしねえって」

「それは信じられねえよ！」

「何でだよ？」

「人を殺したやつに言われても信用できねえよ！」

一人は右手で机を強く叩き、氷室を睨みつける。彼の強面に怯みそうになったが、全力で睨む。

氷室は目を細めた。相変わらずの顔ではあるが、どこか切なげにも見える。しばらく黙った後、一つ息を吐いて氷室は語りだした。
「確かに、俺らは自らの命や一般人の命が危ない場合に犯人を殺してもやむなし、とされてる。だがな、俺は一度たりとも殺したことがねえ」

「白々しい」

「……お前、昨日見たんだよな？」

「見たよ。お前が殺すところ」

「違え。俺が凍らせたやつの能力だ」

「……ああ」

「どんなだった？」

「どんなって……。やつが顔を掴んだ途端、体に火が着いて――」

「そう、やつの能力は火だ」

「だからなんだよ！？」

「俺の能力は氷だ」

そう言われて一人は少しの間思案する。そして、間もなく答えに行き着く。

「……あ」

「溶けたんだよ、あの後。それも織り込み済みだ。俺は人を殺さねえ」

反応に窮する。恐怖すら感じる顔つきでも、信じがたいような力を持つていても、彼の言葉には力強さがあり、偽りはないように思えた。

そうでなくても、少なくとも昨日は人を殺さなかったというのは真実のようだ。

「……悪かった」

「わかりやいい。話を戻すぞ。手っ取り早い方法つてのは、これだよ」

氷室はポケットからライターのようなものを取り出す。それは昨夜にも見たものだ。見た目は百円ライターと変わりはない。違うといえは中のオイルが見えないことくらいだろうか。だがそれもスケルトンではない普通のライターと一緒にいえばそうだ。

「これは、置換機だ」

「チカン機？」

一人は首を傾げる。「チカン」が「痴漢」としか変換できなかったが、絶対に違うと断言できた。

「……変な想像すんじゃないぞ。ガキか」

「してねえよ！」

「まあ、いい。能力者に関する記憶を消す装置だ。これを使えば他言されないですむ」

「ちよつと待てよ！ そんなものがあるなら……」

「まあ、そうだな。普通お前みたいな被害者にはこんな話はしねえ。これを使えば一発ですむ話だ。実際、俺もお前にこれを使って、それで終いだと思ってた。昼まではな」

「昼までは？」

「ああ。だが、お前に説明する必要が出てきた。お前に能力が発現した」

「は？」

今度も”ハツゲン”が”発言”としか変換できなかった。しばらくしてようやく”発現”にたどり着いたが、今度はその意味をつかみ損ねた。

「いやいやいや！！　ちょっと待ってくれよ！　わけわかんないって！！」

「お前、今日俺がお前を追っかけてたとき、最後に何したか覚えてるか？」

一人は気を失うまでのことを振り返った。自転車を掴まれ、蹴りを防がれ、体当たりを避けられ、こいつが近づいてきて、最後に――
「お前は消えたんだ（・・・・）。俺の目の前から。見つけたときにはお前は近くの家の屋根に上っていた。それを異能と呼ばずに何と呼ぶ？」

「……俺には関係ない」

「残念ながら大アリだ。世の中に認知されず、それでいて確かに存在する危険な力だ。こちらとしてもそれを管理する必要がある」

「どうしろってんだよ！！」

「どうもしない。今のところは、な。だが、こちらはお前を能力者として認知する。管理する。必要があれば監視する」

「……消してくれよ」

一人は微かな、枯れるような声で呟いた。氷室は聞こえなかったように、眉をひそめた。

「消してくれよ！　こんなわけわからねえ力なんていらねえよ！　消せるんだろ？　そのライターで！　こんなに関わりたくねえよ……」

……

「消してやりたいが、無理だ。能力者は能力に耐性ができて、この置換機くらいの力は受け付けない」

「嘘だっ！」

一人は勢いよく立ち上がる。氷室は微動だにせず一人を見つめたままである。

「嘘じゃない」

一人は殴りかかりたいと思ったが、それを抑え、力なく座り込んだ。

「……慰めるつもりはねえよ。運が悪かった、それだけだ。くじ引きで外れを引いちまったのさ」

「くじなんて引いてねえよ……！」

「出さなきゃ負けよ、ってやつかな？ ああ、そりゃジャンケンか」
一人はうなだれる。

一人も氷室も何も言わない。しばらくして氷室が大きく息を吐いた。

「今日はもう帰れ。忘れるとは言わねえが、普通に暮らして構わない。それと、これ持ってけ」

氷室は置換機をテーブルの上でスライドさせた。ちょうどよくそれは一人の前で止まった。だが一人はそれを手に取らなかった。

「……いらねえよ」

「そう言っな。さっきみたいに勝手に能力が発現したらどうすんだ？ 吃驚人間ショーにでも出るか？」

氷室は鼻で短く笑った。一人は少し迷ってそれを受け取ると立ち上がった。

第五話 休んだ日に宿題

「また会つかもな」

立ち上がりドアへと向かう一人に向かって氷室が言った。

「会いたかねえよ」

振り向かず一人は即答した。乱暴に扉を開けると龍瀧が立っていた。そこに人がいると予想していなかったので一人は驚いた。一方、彼女は一人の乱暴な振る舞いにもたいして驚きもせず一人を一瞥する。

「送るわ」

相変わらず事務的に話すと翻してエレベーターへと向かう。一人も後をついていった。ふと来たときに見た、開いていた扉を覗き込んだ。こうして見るとあくまで一般的な職場にしか見えない。だが、ここで働いている彼らは皆、この狂った世界に住んでいるのか。

エレベーターに乗り、駐車場に出て青いスポーツカーに乗り込む。それまでも、それからも会話はほとんどなかった。したくもなかった。

外はまだ明るかった。時計を見るとまだ三時だった。密度の濃い時間だったため、五時くらいになっていると思っていた。

一日ですべてが変わってしまった。能力？ 異能？ 馬鹿馬鹿しい。だが、馬鹿馬鹿しくもそれを否定できない。受け入れまいとしたところで、現実は無慈悲なまでに押し寄せる。

無理矢理口に放り込まれ、無理矢理咀嚼させられ、無理矢理飲み込まれる。美味いか不味いかなんて関係ない。食べなくては生きていけない、それだけだ。

果たしてこのまま何事もないように暮らしていけるのだろうか。そんな不安がよぎる。無理だ。不可能だ。何事があったのだから、何事もないように、なんてできるはずがない。

「まだ、信じていない？」

家も近くなつた頃、龍瀧が口を開いた。

「別に。信じたよ。けど、俺には関係ない」

「そうでしょうね。けど、覚えておいてね。紛れもない事実だということを」

「関係ない」

一人は繰り返した。それは龍瀧にというよりも、自分を諭しているのだと自分で思った。

「ええ、けど無視しちゃ駄目。日本で一日に九十人が自殺しているとか、世界中で一日に四万人が餓死しているとか、それと似たようなもの。あなたはこれを無視できる？」

「説教？」

一人は龍瀧を睨んだ。龍瀧は運転しているので一人の方を向かなかつたが、口調でわかつたらしく、バツの悪い顔をした。一応感情はあるらしい、というのは失礼だろうか。だが、関係ない。

「あら、ごめんなさい。ただね、知っててほしいのよ。つまりね、何かしろと言ってるんじゃないの。別に世界中で餓死者が出るから募金しなさいとか、食事の時に有難みを感じなさいとか、そんなことじゃないの。もちろんそれは立派なことではあるけどね。自戒……に近いかしら。自分の知らないところでそういうことがあった。信じられない能力があった。それだけ知っていればいいわ。そのあとどう感じるかはあなたの自由。それだけ。……着いたわ」

車は一人の家の前に止まった。彼は急いで車を降りる。扉を乱暴に閉めようとしたが、迷つて慎重に閉めた。弁償などという話になつたら途方もない金額だと思つたからだ。

一刻も早く、現実に戻りたかつた。だが、彼女はドアの窓を下げて話しかけてくる。早く帰ってくれ、と一人は少し苛々した。

「学校には話を通しておいたし、自転車は学校に置いてあるわ。あとこれ」

彼女は小さな紙切れを差し出した。

「何、それ」

「氷室の電話番号」

「いらねえよ」

「吃驚人間ショーにでるだけならまだマシよ。もっと最悪なケースを想像しなさい」

最悪なケース……、それは昨日のように能力者に殺されることだろう。

「別にね、刃物で殺されようと、拳銃で殺されようと、能力で殺されようと、たいして差はないのよ。だから特別扱いしない。それ故に世間に公表する必要はないとこちらは考えてる。世界の混乱と天秤に掛けての結論よ。だからあなたも特別扱いしない、というのが道理なのだろうけど、被害を最小限にしたいというのは当たり前前提としてあるから。つまり――〇番の代わりと考えてもらっていいわ」

一人は少し考えて、それを奪うようにして受け取った。乱暴にブレザーのポケットにしまいこむ。

「そうそう、あなた、体育で何やってる？」

「は？」

「いいから」

「……陸上、だけど」

「そう。加減して走った方がいいわよ」

「は？」

「じゃあね」

彼女は窓を閉めるとそのまま車を発進させて去って行った。

「……何なんだよ」

母は買い物にでも出かけているのかいなかった。台所で水を一杯飲んでから二階の自分の部屋へ上がった。

鞆を無造作に投げつけてからベッドに倒れこむ。

「ああもつつ――」

ベッドに体を乱暴に埋めてみても、何も変わらなかった。

枕を思いつきり投げつけてみてた。何も変わらなかった。変わるはずがなかった。

たとえ、手当たり次第に物を放り投げても、感情の許すままに壊してみても、それは変わらないのだろう。

自分の中に渦巻く感情。恐れか、悲痛か、絶望か。

何がそんなに恐ろしいのか。

何がそんなに悲しいのか。

何がそんなに耐え難いのか。

そう問われても答えられない。答えられないが、確かにそうなのだ。

ゲームのような、漫画のような能力が手に入って嬉しくないのか？ 嬉しいはずがない。そんなやつがいたら聞いてみたいものだ。人が殺されるところを見たことがあるのか？ と。

一人の頭には未だに昨夜の光景がこびりついていた。犯人のおぞましい笑みも、被害者の悲痛な断末魔も、人が焼ける匂いだって思い出せる。

そんな力が嬉しいのか。

拳銃を渡されて人を撃つてみたいと思うのか。たいていの人は目の前にそれがあるだけで恐怖で身を引いてしまうだろう。

それと同じ。自分は拳銃と同じなのだ。人を殺してしまうかもしれない。人に殺されるかもしれない。そんな世界で生きていけというのか――

「……………ん」

着たままの制服のズボンが振動した。部屋は暗かった。どうやら眠っていて、今の振動で目が覚めたようだ。相当に眠りが浅かったらしい。

見てみると電話ではなくメールで、送り主は花梨。件名なしで本文には「あーけーてっ」とあった。

「……………あ？」

ゆっくりと起き上がって部屋の明かりをつけた後、窓際へと向かう。都市の外灯のせいか晴れているが星は見えない。目線を下へとおろすと、外灯からでもよくわかる笑顔で手を振る果山花梨の姿があった。

状況が呑み込めなかったが、とりあえずとりあえず部屋着に着替えて階段を下りていく。そのまま玄関を開けると目の前に花梨が立っていた。

「何だよこんな時間に」

高校生が出歩いてはいけないほどの時間（このご時世、もはやそんな時間はないに等しいが）ではないが、普段なら夕食も済ましてさて何をしようかといった頃合いである。そう思うと急に腹が減ってきた。

「ちよつと、ね」

そう言うとは花梨は勝手知ったるといった様子で上がりこむと居間の両親に挨拶をして（花梨じゃなかったら大変なことになっていただろう）二階の一人の部屋へと向かっていった。一人は両親に「帰ってたの？」と言われた。

「うわあ、久しぶりだね、一人の部屋」

一人の意向を全く無視して花梨はひとり感慨に耽っている。

「勝手に入ってんじゃねえよ」

「お邪魔します」

彼女は一人と向き合って頭を下げた。

「そういう問題じゃねえ。何しに来たんだよ、こんな時間に」

「えっとね」

花梨はベッドに腰掛けると鞆をあさり始める。私服だが、持っている鞆は学生鞆だった。

「あった。はい、今日のプリント」

鞆の中からクリアファイルを取り出し、その中の数枚の紙を一人に手渡す。

「何だよ、こんなの明日でいいじゃん」

「これはついで」

彼女はベッドから立ち上がり、押入れへと向かう。一人に無断でそこを開けると、下の段に入っている小さめの折りたたみテーブルを引っ張り出してきた。

「おい？」

基本的に部屋の模様替えなどすることはないので最後に花梨がやってきた頃と変わらないはずだが、それでも無闇に部屋の中を物色されるのはあまり好ましくない。別に見られてまずいものがあるわけではないのだが。

「数学？、五十八ページ問七、八、五十九ページ練習問題全部、英語？、三十二ページ英文和訳」

「……は？」

「明日までの宿題」

「げ。そんなの……」

「『休んでいた？ そんなの言い訳じゃないか。君たちには携帯電話という文明の利器という物があるんだ。それとも君には宿題を教えてくれる友達すらないのかい？ ははは』」

彼女は少し声を低くして言った。これは一人たちの数学教師が授業を欠席したために宿題をやったなかった生徒に対する決まり文句である。だが、似ていない。

「似てた？」

彼女としては自信があつたのだろうか、そんなことを尋ねてくる。

「うるせえよ。……まあ、教えてくれてありがとよ」

「一緒にやる！」

かく言う彼女は既に数学一式を机の上に展開している。

「何でそうなる」

一人は頭をかいた。

「教えてくれたっていいじゃない」

「ったく」

一人も鞆から数学一式を取り出して折りたたみテーブルに置いた。

花梨と向かい合わせになるようにして座り、黙々と宿題をやり始める。テーブルは小さかったが、二人の教科書、ノートを置くことはできた。

しばらくの間、二人は全く話さずに宿題を進めていた。花梨も集中しているようで一人に話しかけたりはしない。

「俺、まだ飯食ってねえんだけど」

途中で一人が空腹に耐えかねて花梨に訴えた。

「え、言ってくれば良かったのに。食べてきていいよ」

一人はそう言われて立ち上がった。結局、二人で行う意味はほとんどなかった。

実際、意味はないのだろう。

花梨は知っているはずだ。今日一人が学校を抜け出したことを。

花梨は知っているのかもしれない。一人が何かに気を病んでいることを。

一人は知っていた。花梨が不器用だということ。

一人は知っていた。花梨が自分より頭がいいことを。

一人は知っていた。花梨が一人に教えてもらうようなことはないことを。

だから。

「ありがとう」

こんな言葉が出てきたのかもしれない。

「え？ 私がご飯食べちゃダメとか言うと思ったの？」

少し花梨は不機嫌になった。

「いや、なんでもない」

言うてからあまりにも恥ずかしくて（しかも誤解されて）一人は目を背けた。花梨は訝しげに首を傾げていたが、やがて気にしないことにしたらしい、視線を自分の左腕の時計に向けた。

「あっ！ もうこんな時間！？」

「最初からこんな時間だったぞ」

「もう帰らなきゃ」

「何だ？ 何かあんの？」

「明日のお弁当の準備しなきゃ」

彼女は慌ただしく自分の教科書やノートを鞆に詰め込んでいく。

「え、お前、自分で弁当作ってんの？」

「そっだよ？」

「はあ、何か意外」

「え、何？ それって馬鹿にしてる？」

「いや、普通に意外」

「感心、とかって言って欲しいな」

「ああ、うん」

「何、その気のない返事は？」

花梨はそう言っただけで頬を膨らませる。その仕草がわざとらしくて、何だか可笑しくて、一人は笑った。

第六話 フライング

翌日、朝起きた時点で気分は憂鬱だった。歩いていても憂鬱、教室にいても憂鬱だった。

憂鬱、憂鬱、憂鬱……。

「はあ……」

俺は駄目なやつだ。一人はそう思った。

昨夜花梨の不器用な励ましで気が晴れたと思っていた。

それでも気が少し晴れたとはいえ、あくまで少しである。授業中黙って聞いていれば、自ずと昨日、一昨日のことを振り返ってしまう。まだ信じたくないのだろうかと自問自答する。むしろ、信じてしまったからこそ困惑しているのかもしれない。

一人でいればどんな霏がかかっている。五里霧中、暗中模索。

普段は寝てしまう授業も起きていられた。もちろん、内容はこれっぽっちも頭に入っていない。これはいつも通りだが。ずっと頭の中で「能力」と「異能」というフレーズがぐるぐると回っていた。

「なあ、お前、変だぞ？ 昨日何があった？」

四時限目が終わったところで、良介が一人と太一のもとへやってきた。開口一番にそれである。それほど態度に出ているつもりはなかったのだが。

「あ？ 何でもねえよ。それより昼飯買いに行こうぜ」

一人は立ち上がった。だが、良介は動かなかった。

「お前、授業聞いてないときはたいてい寝てるだろ。今日は授業も聞かない、寝てもいない。心ここにあらず、って感じだったぞ」

「ちよつと待て、俺が寝てなきゃおかしいってか？」

「そこまでは言っていない。聞いていないときは寝てるってのも言い過ぎた。悪い。ただ、とにかくおかしいんだよ、昨日から——」

「なあ、今日もお預けでいいわけ？」

良介が退かずに尋ねてきたところを太一が割って入って来た。昼

食のことを言っているのだ。ナイスタイミングだと、一人は内心で拍手を送った。

「む。仕方ない。行くか」

三人はそろって教室を出て行く。出ていく寸前、やたらとわざとらしい咳払いが聞こえた気がして振り返った。だが、誰のものはわからなかった。タイミングがタイミングだったので自分たちに向けられたものだと思ったが、どうやら自分たちには関係ないようだ。こんなことはよくある。

花梨は弁当箱二つを持って遠山柑奈の席まで向かう。柑奈の前の席の生徒は別の席に移動しているので（そうやって昼休みは漏れなく重複なく別の席に移動できるのである）その席を反転させて席に座る。黙って、弁当箱の一つを柑奈へと渡した。

「これで何回目？」

遠山柑奈はそう言って目を細める。呆れたと言っているが、睨んでいるように見える。彼女は三白眼で、悪い目つきがさらに悪くなるから本当に呆れた時しか顔に出さないの、とその時も同じ表情で言っていた。たしかその時が初めて弁当を渡した時だったと思う。

「そんなの数えてないよ」

「十四回目」

ため息をつきながら柑奈は答える。それを聞いて花梨もため息が出そうになる。

「え、嫌だ、数えないでよ」

「まあまあ、気にしなさんな。それにしても呆れたねえ。ま、別に私は昼食代がお小遣いに回るからいいんだけどさ」

彼女は相変わらずの細目で花梨を見ている。弁当箱を開けると感嘆の声を上げる。いただきますと、律儀に手を合わせて言うと、真っ先に玉子焼きに手をつける。

「いやいや、この玉子焼きはいつ食べても美味ですなあ」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

花梨はにつこりと微笑むが、同時に柑奈に睨まれてしまう。今度は本当に睨んでいるようだ。

「はあ、それを誰かさんに言ってほしくないのかねえ」

「口調がいやらしいよ」

苦笑しながらも自分の弁当箱も開けて、食べ始める。

「ふん。ほんとに呆れるよ。十年も付き合いがあって、未だに弁当の一つも渡せないとはね」

「だって……」

花梨は顔を恥ずかしくなって俯く。

「てか、今更だけど、まあこんなベタベタな方法、思いついたね。もうべったべた。ゴキブリホイホイかっての。私じゃなかったら大笑いされてるよ」

「うつ……」

たとえ柑奈にも大笑いされている事実があるうとも言い返せない。自分の顔は真っ赤になっているのだらうと自覚できた。耳が熱い。

「ま、あの二人が邪魔だっていうのはあるけどね」

「でしょでしょ!？」

「言い訳していいわけ？」

「……寒い」

「じゃあ言わすな」

「言わせてないよ!」

「じゃあ渡してみなさいな」

「うつ……」

根本的問題に帰結し、花梨は言葉に詰まる。

「だいたい、去年はどうだったのさ？ え？ もしかして一年間同じ過ちを繰り返してきたの？」

「過ちとか言わないでよ。去年はクラスが違ったから……」

「なる。ま、明日は渡せるといいねえ。何かあいつ元気ないみたいだし。あげたら喜ぶんじゃない？」

「そう、かな？」

「さあね。てか、あいつどうしたの？ 昨日も途中で帰っちゃうし。何か聞いてないの？」

「うん。聞いてない」

「あ、そ。何でもいいから元気付けてあげたら？ あいつらがギクシャクしてるとクラスがおかしくなるから」

「こればかりは弁当ぐらいじゃどうにもならないかもしれない、と花梨は思った。

「そういえば」

運よくまともな昼食を買うことができた三人がいつものように一人と太一（とその隣）の席に座ると何かを思い出した太一が口を開いた。良介は顔を顰めたが、太一は気づいていない。良介としては先ほどの話の続きをしたかっただろうが、太一はもう忘れているように、全く気にすることなく話し始めた。

「この間、その川沿いで殺人事件があったらしいぜ」

先ほどまでは天使に見えた太一が今度は悪魔に見えた。もっとも聞きたくなかった、そして聞くことはないだろうと思っていた話題に一人は体を強張らせる。

「そこで？」

さすがに話を無視できなかった良介が尋ねる。

「ああ、しかも焼死体だってさ」

「何？ 殺人つてことは火事じゃないんだろ？ 体に火でもつけられたのか？」

「てか何でそんなこと知ってたんだよ？」

平静を装いつつ恐るおそる一人が尋ねる。秘密なのではなかったのか。

「そりゃ、殺人事件なんてすぐ話題になるだろ。むしろ何で知らないの？ ってくらい。ニュースでやってたろ。新聞にも載ってるよ」

「お前がニュースなんて見てんのか」

「悪いかよ？」

「いや、別に。ただ、良介も知らないのか」

「俺はニュース見ないで勉強してるからな」

「ガリ勉」

「うるさいな。俺は勉強してる、太一はニュースを見てる。じゃあお前は？」

「……寝てるよ」

「……ああそう。で、どうなの、太一？」

「何が？」

「だから、火事じゃなくて、殺人だっていう話」

「ああ、何でも体に灯油をかけられて火をつけられたらしいぜ」

「違う。あいつは灯油なんて使わなかった。何も使わずに火をつけたのだ。ということは、なるほど、嘘の情報か。事件を隠すのは無理、ならば嘘の情報を流して現実に近づければいいということだ。」

「なんでも、まだ犯人捕まってるらしいぜ」

「本当か？ 恐ろしいな」

「……捕まってる？ そんな馬鹿な。犯人は氷室が捕まえたはずだ。いや、事件が起きたのは一昨日の夜だ。すぐに捕まえられたと報道する方がおかしいか。だが、悪戯に市民に不安を抱かせるのはどうだろうか。」

「……一人」

良介が眼鏡を上げながら言った。そんなにずれるなら新しいのを買えばいいのに、と思う。

「んあ？」

「どうした、黙り込んで」

「しつこい。そして目敏い。いや、太一が鈍感なだけか。」

「別に、物騒だなと思ってよ」

「本当にそれだけか？」

「しつこいな。何だってさ？」

「……わかった。それより、次、体育だぞ。そろそろ行こう」

明らかに納得していないが、良介はそう言って立ち上がった。

太一はともかく、良介はどうしたものか。なかなか退いてくれそうにない。

体育館の更衣室では意図的に二人から離れた。更衣室はロッカーとは名ばかりの棚が三列ほど並んでいる。明らかにキャパシティをオーバーしていて身動きを取るのすら難しい作業だった。そのため、二人も無理に追ってくることはなかった。

乱暴にブレザーを棚に放り込む。両隣の生徒が顔を顰めた。

「あ、悪い」

どうにも苛々してしまっている。不安・不満のはけ口がないのだ。誰にも言えない、言っても信じてもらえない。そんな事情を抱え込んでしまった。

悪戯を白状できずにもやもやと日々を過ごすときの感覚に似ているが、今回やましいことは全くしていない。むしろ被害者だとも言えるのに。

たとえ信じてもらえるとしても、やはり言えない。心配をかけられない。一般人は知らなくていい世界なのだ。

……自分も一般人のはずなのに。

ため息すら出ない。いつそ叫び散らしてすっきりしてしまいたい。おそらくそんなことですっきりはしないだろうけれど。

思いつきり暴れたい。ある意味体育は絶好の機会である。陸上と言うのが不満といえは不満だが。体を動かせば少しは気が晴れるかもしれない。

そう思いながらジャージに着替えた。ジャージを入れていた袋も棚に入れようとしたが、棚が小さく、制服も乱暴に入れていたため、入りきらなかった。

舌打ちして、もう少し丁寧に入れようと棚の中身を全て一度出した。何かが床に落ちた。

（やべっ……）

ブレザーのポケットから落ちた置換機だった。周りには気づかれ

ていない。他の他人からすればライター以外の何物にも見えない。こういったことを教師に密告する真面目な生徒も少なくない。

咄嗟に足でそれを踏んで隠し、何事もなかったかのように制服を整理して入れた。周りをよく見ながら、靴ひもを結ぶふりをしてそれをジャージのポケットに入れた。

「おーし、今日は百メートルのタイム計るぞ。じゃあ、準備運動から！」

体育教師の指示で、クラスメイトはのろのろと動き出す。生徒たちのレスポンスが鈍いのはおそらくまだ肌寒い季節の外での体育、陸上という地味な競技などといった要因があるのだろう。

グラウンドは先日雪が解けて使えるようになったばかりだった。雪こそないが水はけの悪い端っこは雨が降ったわけでもないのに水たまりがあつた。

四百メートルトラックの中のフィールド競技用の芝生はまだ元気がなく、湿っていた。その中で生徒たちが準備体操を始める。湿っているので座つてのストレッチはしなくなつた。

準備体操を終えて、教師のどうでもいい説明を聞く。いや、聞き流す。百メートルトラックに移動して出席番号順に四列に並んだ。体育は二クラス合同で、一クラス二列。一人の出席番号は七番なので四番目のグループだった。

とにかく、思いつき走りうと一人は思った。その程度で気が晴れるとは思えないけれど、少しはマシだろう。それにどうにも体が軽い。別にタイムに興味はないけれど、自己ベストを出せるかもしれない。

ピストルのけたたましい音にいちいち顔を顰めながら自分の番が来るのを待ち、やがて自分の番になった。

「位置について」

出席番号が後ろ方の生徒がピストルを持ち、号令をかける。一人は地面に手を着きクラウチングスタートの体勢をとる。

「よい」

ピストルの音とともに命一杯地面を蹴る。

最初の印象は、軽い。気分はこんなにも重いと言うのに、やたらと体が動く。もしかしたら陸上部でも愚図なやつには勝てるくらいかもしれないと思った。

背中に羽が生えたよう、などという胡散臭い比喻は信じていなかったが、まんざら嘘でもないな、などと思いながら地面を蹴っていた。気分がよかった。

「……え？」

しかし、それも一瞬のこと。すぐにおかしいと気がついた。

ゴールラインを越えて立ち止まると、そこでタイムを計測していた先生が口をあんぐりと開けて呆けている。

振り返れば同じくスタートしたはずの三人が五十メートルほどの位置であっけに取られて立ち尽くしていた。

「お、お前……！」

先生の声が震えている。一人は状況が読み込めずに、咄嗟にポケットから置換機を取り出して教師に向けていた。

第七話 信号機

「よう。また会ったな」

「また会ったな、じゃねえよこの野郎！ 何なんだよあれは！？」

ここは警察の地下にある特命部のオフィス。その中の執行課の奥のデスクに座っている氷室とその氷室に対し怒鳴り散らしている一人。周りの人間は、ある者はチラチラとそちらを覗きながら作業をしているし、またある者は気にも留めずに自分の作業に浸っている。放課後、一人は真つ直ぐに特命部へと向かった。もちろん、体育の授業のときの真相を知るためである。

あの時、確実に一人は世界記録など優に超えていた。有り得ない話である。だが、現実である。理由は一つしか思い浮かばない。能力のせいだ。

あの後、一人は逃げ惑う生徒全員に置換機を使ってその場を凌いだ。自分の体の異変に気付いた一人にとっては、逃げ惑う生徒四十人を相手にするのも容易かった。

驚いたことに、置換機を受けたクラスメイトたちは、一時気絶していたが、授業の終わり間近に目を覚ますと何事もなく動き出した。それはあまりにも滑稽な光景で、しばらくその場を動くことができなかった。

その後も太一や良介は何事もなく接してくるので、不気味すぎてその時のことを尋ねることはできなかった。

「あれ、って言われてもなあ」

氷室は面倒くさそうに一人を見つめると、ふと思い出したかのようにおもむろに胸ポケットから煙草を取り出し火をつけた。

「何なんだよ！？ 体が、体が……」

「ああ、体がすげえ軽く動くってか？」

氷室は煙草の煙を吐き出しながら言った。

「軽くなってもんじゃないやねえよ！ 何なんだよ一体！？ これも能力

ってやつなのかよ？」

「近からず遠からずだな。能力ってわけじゃないが、能力に目覚めたやつは体が活性化されて身体能力が異常に向上すんだよ」

「何で黙ってたんだよ！ てめえのせいで災難だったぞ！」

「ああ、悪い。忘れてた」

そう言っただけに煙草を押し付ける。

これには一人も頭にきた。

一人は氷室のデスクを勢いよく叩くとそのまま氷室の胸ぐらを掴んだ。さすがに周りの注目を浴びてしまい、部屋中が静まり返り、誰もが二人を見た。しかし、対象が氷室であることがわかると半分ほどは作業に戻っていった。あたりから「また課長か」といった囁きが零れてくる。

「悪い。そりゃ怒るわな。納得しねえよな。わかったよ、納得する理由を教えてやるよ」

そう言っただけ氷室は一人の腕を引き離し、別に身なりを整えることもせずそのまま座り灰皿にかけていた煙草を再び口にする。

「別に忘れてたわけじゃねえんだ。忘れてたって言えば渋々ながら半分くらいは納得するから、いつもまずそう言っただ」

絶対、嘘だろう。

「いいか、俺があえて言わなかったのは認識してもらったためだよ」

「あ？」

「自分が人じゃなくなっちゃったってことをだよ。どうだ、気分はバケモノに？」

一人は今度は氷室のデスクを蹴り飛ばした。振動で書類が飛び散り、コーヒーの入ったマグカップが落ちて割れ鈍い音を立てた。残っていたコーヒーが床に新たな模様を描いていく。

再び左手で氷室の胸ぐらを掴むと、彼を無理矢理立たせ、右の拳を顔面目掛けて――

「おいおい、そうカッパすんなよ」

勢いよく振るわれた右腕は呆気なく氷室の左手の手のひらに収ま

り、バチンと小気味良い音を立てた。

「っ！！」

氷室はその左手で一人の右手首を掴んだ。そして右腕で胸ぐらを掴んでいた左手を剥がす。

「ちようどいい。好きなだけ殴らせてやるよ。おい、有澤」

「あ、はい」

氷室は近くにいた二十代半ばの青年を呼びつける。

「ちよつと付き合え」

「わかりました」

そう返事をして彼は立ち上がる。長身細身で氷室とは大違いの精悍な顔つきである。

「それと、倉本」

「あ、僕もですか？」

呼ばれたひ弱そうな青年が立ち上がりかける。彼も有澤と呼ばれた男と同年代だろう。

「いや。ここ、片付けといって」

「え？　ちよ、ちよつと、課長！」

倉本の泣きそうな声を無視して氷室は一人を引っ張り有澤とともにオフィスを後にする。

一人が連れてこられてた場所は特命部のさらに下の階だった。扉は左右に一つずつと奥に一つ。有澤は右の扉を入っていき、残る二人は奥の扉へと入った。

そこは広い空間だった。小さな体育館ほどの広さだが、真っ白で何もない。ただ、広い空間だった。地下にこれほどの施設があるのには驚きである。

「ここは……？」

「まあ、平たく言えば格技場だよ」

「格技場？」

「ああ、そつだ。さて……」

氷室は一人から距離を取り正対する。二人は格技場の真ん中に立ち、ちょうどこれから試合でも始めるのかというような位置になった。

「これからお前に好きなだけ殴らせてやる。ただし、俺は殴られる気はない。避ける、反撃する。自ら攻撃も仕掛ける。それだけだ」

一人は彼の言っている意味も意図もわからなかった。確かに彼を殴りつけたいほど腹は立っているが、改まって殴り合いを始める気はさらさらない。

「どうした？ こないのか？」

「……知らねえからな」

一人は駆け出し、右腕を振るう。だがそれは先ほどと同じように左手で阻まれた。先ほどと違ったのはその後だ。氷室は掴んだ腕をそのまま下へと振り下ろす。一人はバランスを崩し前のめりになった。

「かつ……！」

そこに氷室の右膝が腹に入った。一人の呼吸が一瞬止まり、そのまま重力にしたがって床に倒れこんだ。

「あら、意外と呆気ないのな」

「うつ、うつせえ！！」

咳き込む一人は起き上がり際に拳を下から突き上げるようにして腹を狙った。それを氷室は体をひねって避ける。そして左足を軸に回転し、右足で一人を背中から蹴り飛ばした。

数メートル吹き飛ばされて、その場に蹲る。両膝をつきながらも体を起こすが、立ち上がるには至らない。

立ち上がれない。

「……ふざけんなよ」

一人は思った。

否、本能で感じた。

強い。勝てるはずがない。

一発入れることさえ無理だろうと。

だが、諦めるわけにはいかない。彼に恨みはない。彼は悪くない。自分も悪くない。誰も悪くない。本当に、運が悪かっただけ。日常から外れてしまったのは、全くの偶然。

それでも、戻りたい。忘れない。納得できない。人が炎を出すことなんて、人が物を凍らせることなんて、恐ろしくて考えたくもない。

そのやり場のない苛立ちをぶつける相手は今彼しかない、それだけだ。

「うわあああああああ！！！！！！」

一人は起き上がり、真っ直ぐ氷室に突っ込む。そして頭目掛けて右足を振り上げる。

「単純だなあ、お前」

それは簡単に氷室の左腕に阻まれる。

だが、それでは終わらない。一人はそのまま右足首を彼の左腕にフックのように掛けて、左足を蹴って飛び上がる。つまり、彼の左足に、乗った。

「なっ！？」

そこからすぐに飛び降り、彼の背後に回る。素早く身を翻すと、同じく振り返った氷室と目が合った。何も考えずに彼の脳天目指して足を振り上げた。

「うらああああ！！！！」

今度こそ右側頭部に命中すると、そのまま氷室を壁際まで吹き飛ばした。

彼は倒れこむが、すぐに起き上がって壁に寄りかかるように座り込むと、薄い笑顔で一人を見つめた。

「なかなかやるねえ。格闘技とかやってたわけじゃないんだろ？」

「んなもん、やったことねえよ」

そう答える一人の息は上がっている。今まで使ったことのないような力を使ったのだから無理もないかもしれない。それでなくても喧嘩なんて何年もしたことがなかった。

「だろうな。型が無茶苦茶だ。だが、筋はいいな。そういや、前もお前に吹っ飛ばされたっけか。あの時はお前も目覚める前だったから痛みはたいしたことなかったんだけどよ。見事に入ったからな」
そう言っただけで氷室は以前蹴られた顎をさすり、埃を落とすようにうすうすを叩きながら立ち上がる。そして、口から血混じりの唾を地面に吐き出す。

「だが、まだまだだ」

言い切らぬうちに、一人の視界から氷室が消える。消えたと思った瞬間には背中に強い衝撃を受けていた。

「がつー！」

今度は一人が壁に吹き飛ばされる番だった。体を強く打ちつけてその場に蹲る。

「この野郎！」

立ち上がり、氷室へと向かう。寸前でステップして、方向を変えて氷室の右後ろへと回ろうとする。

「フェイントのつもりか？」

氷室の左足が伸びてきて一人の腹に命中する。蹲ったところを蹴り上げられて宙に浮き、右の拳が飛び込んでくる。一人の体はピンポン玉のように軽く飛んでいった。

壁まで飛ばされた一人は動かない。動く気力がない。動く体力がない。動く理由がない。

「何やってんだろ、俺」

一人は呟いたが、少し距離のある氷室には聞こえない。聞かせたくない。

このままでは死んでしまう。なぜ？ どうして？ 自分はただ、変な能力に目覚めただけなのに、それだけで殺されてしまうのだろうか。目覚めたことが罪なのか？

『課長！ やりすぎじゃないですか？』

有澤の声が聞こえる。どこかにカメラとスピーカーがあるらしい。
「わかってるよ。もう終いだ」

どこかにあるマイクに向かって氷室が言う。そして、一人のほうに着々と歩み寄る。

「もう終わりだ。俺も暇じゃねえしな」

周囲の空気が冷える。これは……。

「ちよつと、待てよ……」

かろうじて出したその声は、彼に聞こえているとは思えない。

昨日は殺す気はないと言ったじゃないか。彼は自分を氷漬けにする気だ。

彼の歩みは止まらない。

止めてくれ。

歩みは止まらない。

助けてくれ。

止まらない。

どうして俺が。

氷室の手が顔寸前まで近づいた。座っているので見上げる形になる。

「うわああああああああ……！！！！！！！！！！」

次の瞬間、一人の目の前から氷室が消えた。

いや、氷室が消えたのではない。自分が消えたのだ。

一人がそう気づくまでにそうとう時間がかかった。

氷室が消え、視界は天井だけになった。何が起きたのかわからずしばらく呆けていたが、目線を降ろすと、向こう側の壁に氷室がいた。彼は驚きの表情を隠さずにこちらを見ている。

「有澤！ 撮れたか？」

「はい、バツチリです」

氷室は満足そうに頷くと一人の下へと歩み寄る。

「悪かったな。痛かったろ？」

「うるせえよ。さんざん痛めつけといて……」

「すまん。だが、確かめたかったんだよ」

「何を」

「お前の能力と、おまえ自身の力だよ」

「は？」

どう考えても重複するその意味に対して、一人は何も言えなかった。状況がまったく理解できなかった。

「立てるか？」

一人の頭に浮かぶクエスチョンを氷室は気にもせず手差し伸べる。それを一人は弾くと自力で立ち上がった。

氷室は呆れたようにため息をついたが、その表情は笑っているように見えた。

「ついて来い」

氷室は扉へと向かう。

「嫌だね」

一人がそう言うのと氷室は立ち止まり振り返った。驚きの表情が見取れる。

「こんなに痛めつけられて、何でそこまでして従わなきゃいけないんだよ！ 警察はそんなに偉いのかよ！？」

「……お前の為だよ」

しばらく間を置いて、一度ため息をつく氷室は言った。

「お前はこれから今まで見えなかったものが見えてくるはずだ。お前は知らなくちゃいけない。お前だけじゃない。警察だろうとなかろうと、異能を持てば知らなくちゃいけない」

「意味わかんねえよ！ 何を知らなきゃいけないってんだよっ！！」

「それはじきにわかる。というよりも人に言われてわかるものじゃない」

「そんなの納得できるわけねえよ!!」

「痛めつけたのは悪かった。お前の順応力があまりにも悪かったんでな。それと、個人的に実力を見たかった。とにかくもうちょっと付き合ってくれや」

「……………ちっ」

一人は黙って氷室の後について行った。

二人は最初に有澤が入った部屋へと向かった。中は機械室のようで、モニターがいくつもついており、よくわからない機械で埋め尽くされていた。

「どうだ、有澤」

「……………何と言うか、珍しい、と思います。見てください」

有澤は淀みなくキーボードを叩く。すると、一つの画面に先ほどの一人と氷室の戦闘シーンが再生された。ちょうど、最後の場面で氷室が異能を使うところだった。ふと一人が画面から消えた。

「消えてますよね」

「ああ、消えてるな。少なくとも、見えない」

「スローで再生します」

再びキーボードを叩く有澤。すると今度はスローで映像が再生されていく。

「……………遅すぎねえ?」

一人は奇々したように言った。それほど、映像のスピードが遅いのだ。

「百六十キロのボールも止まって見えますよ」

ようやく、氷室の手が一人にかざされたところだった。次の瞬間、一人は画面から姿を消した。

「……………消えてるな」

「消えてます。残像すらありません」

「なあ、さっきから何やってんだよ?」

「お前の能力の確認だよ。お前が、超高速で動いてんのか、それと

も本当に消えているのか、それを確かめたかったんだよ」

「……ってことは」

「このカメラでも映らないってことは、消えてるんだよ。所謂レポート、瞬間移動。おそらくかなり貴重な能力だろうな」

「……それがわかってどうなるんだよ？」

「ん？ 別にどうにもならん」

「はあ！？」

「単純に確かめたかった。そんだけだからな」

「ふざけんな！ そんなことのために俺は殴られたってのかよ！？」

「そんなことって言うな。おまえ自身自分の力を知っておくのは大事だろ」

「殴る必要ないだろ！！」

「じゃあ、今ここで使ってみろよ」

「なっ！？」

「できないだろ？ 使い方を知らねえんだ。だから追い込んで無意識に使わせたんだよ」

「マジ納得できねえ……。帰る！」

一人は出口まで歩き、扉を乱暴に閉めて出て行った。

「あ、おい！ ……行っちゃった」

「言いそびれましたね」

有澤は椅子を回転させて氷室と向き合った。

「何のことだ？」

氷室の口元がわずかに上がった。

「とぼけないでくださいよ。彼を非常勤に誘うつもりだったんですよ？」

「いずれは、な」

「彼、たぶん入りませんよ」

「だろうな」

「非常勤なんて、馬鹿か、それこそ人よししかやらないじゃない

ですか。彼、どっちでもないでしょう？」

「だろうな」

「ええ。特に彼はまだこの異能の存在する世界を受け入れてません。受け入れたとしても、自分から危ない橋を渡る必要はないでしょう。そんなに彼が気に入ったんですか？」

「まあな。あいつに入れられた顎は結構効いた」

「ところで、どこで出会ったんですか？」

「ああ、そりゃな——」

「いい加減にしたら？」

静かな、事務的な口調が室内に響き渡る。入り口にはいつの間にか龍瀧が立っていた。有澤は事態が飲み込めていないようで、氷室と龍瀧を交互に見渡していた。

彼女は持っていた書類をそこにあったデスクに無造作に投げると、睨みを利かせて氷室を見た。感情を表に出している彼女は黄色信号だ。

「私を誤魔化せると思って？ 黙っておいてあげたけど、そろそろ限界よ」

「佐倉には追わせてある」

「佐倉さん、ね。勝手に非常勤を使ったりして。いいの？ 彼女、

オーバーワーク気味よ」

「本人が働きたがってるんだ。仕方ないだろ」

「あなた、本気で言ってるの？」

彼女は強い口調で言った。限りなく赤信号に近い。

「んなわけねえだろ、阿呆」

「ならいいけど。とにかく、部長にバレても知らないわよ。全く、

一度は動きを封じたんでしょ？」

「ちよつと、な。顎が利いた」

「は？」

「いや、なんでもない」

「とにかくマズイわよ」

彼女は一度デスクに置いた書類を手取る。そこにはある男の経歴が記されていた。かなり際どい、犯罪間際のものが多数と、実際に犯した犯罪もいくつか。さすがに殺人は一度もなかったが、今回晴れてそれが加わる。

「犯人に逃げられた、なんてね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5361y/>

偶然壊された世界で

2011年12月1日21時54分発行